

# 社会委員会通信

16

2004.7.4

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

2004年度、横浜港南台教会社会委員会の最初のイベントは6月6日(日)に『ビデオ上映会』として行われました。委員会では、ミーティングを重ね、「今年はパレスチナ問題の学習会(10月実施予定)をやりたい!」ということが提起され、その前段として、パレスチナの問題のビデオ上映をすることにしました。

パレスチナから送られてくるニュースは、私たちが聖書で親しんでいる地名を含むものがありますが、そこで起きている現実、暴力と報復の連鎖であり、私たちは深い悲しみに襲われます。日々変化するイラク情勢も、元をたどっていくとパレスチナ問題にブチあたります。しかしながら、パレスチナ問題は、歴史的にも政治的にも複雑で、理解することは容易ではありません。今、かの地で起きている諸問題を、今、私たちの問題として、少しでも思いを馳せることが必要であるように思います。今回のビデオは、日本のNGOがパレスチナを訪ねたドキュメンタリービデオで、ニュースでは報道されない様々なパレスチナ(とイスラエル)の側面を写しだしていました。ビデオにてでくる人々は、決して《過激派》でも《テロリスト》でもなく普通の市民であります。しかしその普通の市民が日々殺されていくのです。

さて、今回のビデオ上映会は、参加者が19名(女性11名・男性8名)でした。ちょっとさみしい感じもしますが、この通信をお読みいただいて、パレスチナ問題の理解を深めていただければと思います。なおビデオは教会のビデオライブラリーに加えますので、どうぞご覧下さい。また、今年度も教会員と求道者の皆様のお力をお借りして、活動をしていきたいと思っておりますので、今年度もよろしくお願いたします。

(社会委員長：K.A)

ドキュメンタリー・ビデオ鑑賞：「被占領下パレスチナを訪ねて」

アル=アクサ・インティファダはなぜ起きたのか

制作：パレスチナの平和を考える会

今、パレスチナで起きていることが、決して2千年間憎しみあってきた民族間の「暴力の応酬」でもなければ、日本人には理解できない宗教紛争でもないこと(むしろ日本が担ってきた植民地主義の歴史に目を向ければ、基本的な問題構図は東アジアに住む私たちにとってもごく馴染みの深いものだ)、そして、パレスチナの人々が求めているのは、人間として尊厳を持って当たり前になりたいということなのだというのが、このビデオを通じて少しでも伝われば望外の喜びである。

(解説ノートより抜粋)

## 用語解説

### インティファダ(民衆蜂起)

1987年12月、ガザ地区のイスラエル検問所で軍の戦車輸送車輛がパレスチナ人の車列につっこんで11人の重軽傷者を出した事件が口火となって、自然発生的なデモが起こった。子どもや女性も参加したこの抵抗運動は被占領地全体に広がり、投石による抵抗が中心であったために、やがて「石の革命」と呼ばれるようになったが、湾岸戦争とオスロ合意で沈静化。2000年9月には、シャロン・リクード党党首によるエルサレムの聖地への挑発的訪問をきっかけに第2次(アル・アクサ)インティファダが勃発。

### アル・アクサ・インティファダ

2000年9月28日以来、イスラエルとパレスチナの間で激しい衝突が続いている。パレスチナ人のインティファダに対し、イスラエル側は過剰な武力で反応しているため、特にパレスチナ側に多くの死傷者が出ている。今や両者の間は暴力が新たな憎しみと暴力を生む悪循環に陥っている。

この衝突はそもそもイスラエル右派リクード党党首、アリエル・シャロン氏(現イスラエル首相)が、エルサレムにあるイスラム教徒の聖地に、周囲の強い反対を押し切って強行に足を踏み入れたことに端を発している。そのためパレスチナ人はこのインティファダを聖地にあるモスク、アル・アクサ・モスクの名前をとって、「アル・アクサ・インティファダ」と呼んでいる。

インティファダ拡大の背景には、オスロ合意以降も依然として続いたイスラエルによる占領や人権侵害、入植地の拡大政策に対する不満、その一方で和平合意の恩恵にあずかれない経済的に困難な人々の絶望感が高まっていたことがあげられる。

### シオニズム

19世紀後半から、ヨーロッパのユダヤ人の中で始まったユダヤ国家建設を至上価値におくユダヤ民族主義運動。シオンとはソロモン神殿があったエルサレムの丘の名で

エルサレムおよび古代ユダヤ王国の象徴。1896年テオドール・ヘルツルが「ユダヤ人国家」を出版、翌97年の第1回シオニスト会議で「パレスチナにユダヤ民族の郷土を建設する」とのバーゼル綱領が採択され、シオニズム運動が本格化。1930年代以降、ナチスの迫害から逃れるためパレスチナへの移民が急増、1948年のイスラエル建国の後は国家イデオロギーの支柱となっている。

### ◆パレスチナ難民

国連パレスチナ難民救済事業機関の統計によると、同機関に登録されているパレスチナ難民の数は下記のとおりである。

地域	難民の数
レバノン	367,043人
シリア	401,185人
ヨルダン	1,679,623人
ヨルダン川西岸	626,532人
ガザ	878,977人
合計	3,973,360人

1948年以前には、現在のイスラエル・ヨルダン川西岸・ガザを合わせたところがパレスチナと呼ばれていた。ここで言うパレスチナ難民とは、48年にイスラエルが建国されたことによって住んでいる土地を追われ、周辺地域に逃れた人とその子孫のことである。

現在、全世界には約500万人のパレスチナ人がいると言われている。この中には、イスラエルが建国された時もその地にとどまり、その後イスラエルの国籍を得た約70万人の人々、48年以前からヨルダン川西岸やガザに住んでいて長くイスラエルの占領下に置かれた人々、あるいは欧米に移住した人々も含まれている。

国連は、パレスチナ難民に対して元の居住地に帰る帰還権を認め、また帰らない場

合でも財産などの保証を認めているが、イスラエルはこれを拒否している。

### ヨルダン川西岸地区

第1次中東戦争後、ヨルダン領とされたが、1967年の第3次中東戦争でイスラエルに占領され、現在に至る。ガザ地区と合わせると茨城県ほどの面積。そのうち約4割が「暫定自治区」とされている。約200万人のパレスチナ人(内1948年の難民が約3割)とユダヤ人入植者40万人(内20万人は東エルサレムの入植者)が住む。

### ガザ地区

第1次中東戦争後、エジプトの支配下に置かれたが、ヨルダン川西岸と同様、第3次中東戦争以降はイスラエルの占領下にある。約4割の土地がユダヤ人入植地で占められている。約120万人のパレスチナ人(内1948年の難民が約8割)と約6千人のユダヤ人入植者が住む。

### PLO(パレスチナ解放機構)

1964年にアラブ民族主義の旗手であり、アラブ団結を象徴していたナセル大統領の推進のもとに形成された。パレスチナ人の権利を代表する機関として成立し、国会にあたるPNC(パレスチナ国民議会)と内閣にあたる執行委員会をもつ。世界に離散しているパレスチナ人の支持を得、同年にパレスチナ民族憲章を採択している。第3次中東戦争の敗戦を期に、パレスチナ人の主体的な解放組織ファタハが主導権を握る。

### オスロ合意

1993年初めよりノルウェーの仲介によりPLOとイスラエルの間で秘密交渉がオスロで行われ、8月に「暫定自治に関する諸原則の宣言」が仮調印された。その後9月にホワイト・ハウスでアメリカの主導のもと、正式に調印された。

初めてイスラエルがPLOを承認した合意であるが、当事者であるパレスチナ人の自決権や難民問題、エルサレム問題等の重要案件については全て先送りされている。

### ◆ユダヤ人入植地

19世紀後半からシオニズム運動の流れのもとでパレスチナへのユダヤ人入植が進められ、イスラエル建国に際して、ユダヤ人入植地は重要な戦略的拠点となった。現在ユダヤ人入植地と言う場合、第3次中東戦争以降、占領地に建設されたものを言うことが多く、占領の既成事実化のための戦略的役割を担っている。オスロ合意以降、入植地の人口は倍増しており、和平への動きに対して最大の障害となっている。

### ◆ロードマップ

カルテット(米・露・EU・国連)が策定、2003年4月30日、米政府がイスラエル政府・パレスチナ自治政府双方に提示した和平案。3段階に分かれており、第1段階において、双方の停戦とパレスチナ側での選挙の実施。2003年12月までに暫定的な国境線を持ったパレスチナ国家樹立。2005年までにエルサレム問題、入植地問題、国境等の問題を合意するというもの。しかし、これらの問題について具体的に合意できる見通しもなく、イスラエル軍の相次ぐ軍事侵攻と頻発する自爆攻撃によって、第1段階の履行さえ実現していない。

### ◆分離壁(アパルトヘイト・ウォール)

2002年6月より、イスラエルが「保安壁」と称し、ヨルダン川西岸地域の北西部で建設開始。イスラエル・パレスチナの境界ではなく、パレスチナ側に大きく食い込む形となっている。高さは約8m(ベルリンの壁の2倍の高さ)で、上には高圧電流が通り、300mごとに監視塔が立つ。この壁によって、パレスチナの他の地域と完全に分断され、孤立する村がいくつも出現する。すでに180kmが建設され、最終的には、少なくとも650kmに達する予定。この壁建設によって、多くの農地が収用、破壊され、また、壁の向こう側になり、たどり着けなくなる農地が続出している。水源も壁の向こう側に取られてしまう。これによって、パレスチナ人の生活空間は壁に囲まれ、分断され、移動を制限・管理されることになるため、アパルトヘイト・ウォールとも呼ばれている。

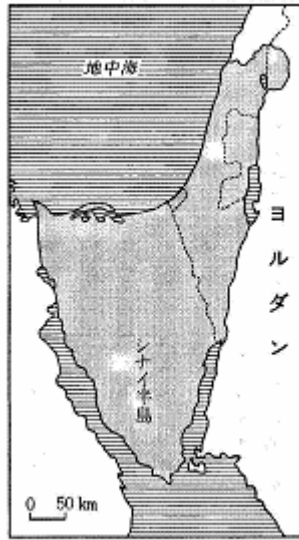
## パレスチナ・イスラエル略年表

年	出 来 事
1897	バーゼルで第1回シオニスト会議
1914	第一次世界大戦勃発(～1918)
1915	フセイン・マクマホン往復書簡(～1916)
1916	サイクス・ピコ協定
1917	バルフォア宣言
1918	ファイサル、ダマスカスにて「アラブ政府」樹立
1920	サンレモ会議、サイクス・ピコ条約を追認。ファイサルは追放される
1921	イギリス、アブドゥラーを「トランスヨルダン首長国」の首長にする
1922	イギリスのパレスチナ委任統治が国際連盟で追認される
1929	エルサレムのユダヤ教聖地「嘆きの壁」でユダヤ人とパレスチナ人が衝突
1933	ドイツでナチスが政権を掌握、パレスチナへのユダヤ人の大量移住始まる
1936	アラブ大蜂起(～39) 英委任統治政府及びユダヤ人入植者に対してパレスチナ・アラブ人が蜂起
1947	国連パレスチナ分割決議案採択
1948	デイル・ヤーシン村の虐殺。400人の村民のほとんどが殺される イスラエル建国宣言、第一次中東戦争勃発 パレスチナ難民の帰還権を認めた国連総会決議 194 採択
1956	第二次中東戦争(スエズ動乱)。カフル・カセム村虐殺事件
1964	エルサレムで第1回パレスチナ民族評議会(PNC)開催 PLO(パレスチナ解放機構)創設
1967	第三次中東戦争(六月戦争、六日戦争)。イスラエル、東エルサレムを併合 占領地からイスラエル軍の撤退を求める安保理決議 242 採択
1969	PLO 議長にヤセル・アラファトを選出
1970	ヨルダン内戦(黒い9月)。PLO のヨルダン撤退
1973	第4次中東戦争。安保理決議 338 採択
1974	第七回アラブ首脳会議で PLO をパレスチナ人の「唯一正当な代表」とするラバト決議採択 PLO に国連オブザーバー資格付与
1975	レバノン内戦勃発
1976	ガリラヤ地方の土地収用に抗議するゼネストで、6人のパレスチナ人が殺される レバノンのタル・ザータル難民キャンプで4,000人のパレスチナ人が殺される
1977	イスラエルにベギンを首相とするリクード 政権成立
1978	イスラエルとエジプトの平和条約締結を決めたキャンプ・デービッド合意成立
1979	イスラエルとエジプト国交を樹立
1980	イスラエル国会、エルサレムを恒久の首都と定める宣言(エルサレム基本法)採択
1981	イスラエル国会、ゴラン高原併合を可決
1982	イスラエル軍、レバノンに侵攻。PLO、バイルートから退去 アラブ首脳会議、「フェズ提案」採択。67年占領地からの完全撤退を条件にした一括和平案

1982	ベイルートのサブラ・シャティーラ難民キャンプ虐殺事件
1985	アンマン合意、PLO とヨルダンが共同和平方式に合意
1987	インティファダ開始
1988	フセイン・ヨルダン国王、西岸を法的・行政的に放棄する宣言 PNC アルジェ大会でパレスチナ独立国家宣言
1990	イラク、クウェート侵攻
1991	湾岸戦争 マドリード中東和平会議、PLO の参加認められず
1992	ラビン労働党連立内閣成立 イスラエルが占領地の 418 入のパレスチナ人を南レバノンへ追放
1993	ワシントンでパレスチナ暫定自治に関する諸原則宣言(オスロ合意)調印
1994	ヘブロン虐殺(29 人のパレスチナ人が死亡) ガザ・エリコ先行自治協定(カイロ協定) イスラエル・ヨルダン平和条約締結
1995	パレスチナ自治拡大協定(タバ合意)
1996	パレスチナ暫定自治区で総選挙、アラファト自地区代表に当選 イスラエルがレバノンの国連キャンプ爆撃(カナ虐殺) リクード党党首ベンヤミン・ネタニヤフ、イスラエル新首相に当選
1997	イスラエル、ハール・ホマ入植地建設着工を強行→和平交渉中断
1998	ヘブロンからのイスラエル軍撤退合意(ヘブロン合意) イスラエル軍追加撤退合意(ワイ・リバー合意)
1999	総選挙でバラク候補、ネタニヤフを破って首相に選出 シャルム・エル・シェイク覚書(修正ワイ・リバー合意)調印
2000	イスラエル軍、レバノン撤退終了 キャンプ・デービッドで三首脳による和平交渉 リクード党党首シャロンがエルサレムの聖地を強行訪問 第二次インティファダ勃発
2001	イスラエル首相公選、シャロンがバラクに圧勝 パレスチナ解放人民戦線(PFLP)議長暗殺 アメリカの世界貿易センタービルとペンタゴンにハイジャックされた旅客機が追突 PFLP メンバーがゼービ・イスラエル観光相を暗殺
2002	イスラエル軍、西岸自治区ラマッラーを制圧 アラブ首脳会議、サウジのアブドラ皇太子による和平案をもとに「ベイルート宣言」採択 イスラエル軍、ラマラに侵攻、議長府包囲 シャロン首相、アラファト議長を「敵」と宣言 イスラエル軍、ナブルスに侵攻、西岸の自治区 8 都市のうち 6 都市を制圧 イスラエル軍、ジェニンの難民キャンプを攻撃。50 人以上が死亡(ジェニンの虐殺) イスラエル軍、西岸の隔離壁の建設を開始
2003	米英によるイラク攻撃開始 パレスチナ議会がアッバス新内閣を承認 米大統領、新中東和平案「ロードマップ」を発表 アッバス首相、シャロン首相、ブッシュ大統領の三首脳がアカバで会談




2002年4月現在



第三次中東戦争(1967年)終結時  
(シナイ半島は1982年にエジプトへ返還)



第一次中東戦争  
(1948-49年)終結時  
(の部分)の変遷



## ビデオの感想



A : パレスチナ問題はなかなか難しい。今のビデオを見ても、これが一体どこの問題で何故そういうふうになったかという基礎的なことを日本人の何パーセントが分かっているだろうか？ でも日本人の中で、ある程度パレスチナ問題に意識を持っている人たちは、根っこに何があるかが一応分かっているので、それを議論できる。ところがアメリカ社会では、まともに議論できない。そういう背景も我々は知らなければいけないと思う。日本人にとってパレスチナは非常に遠いところだから、入植地問題とは何なのか、そういうことから広げていかないと、全体の理解を得るのは難しい。

B : 400 人の入植者を守るには、1 万人もの兵隊を配置しなければならない。もともとパレスチナ人の土地にユダヤ人の入植地を転々と置くことによって、既成事実を作ろうとしているわけだが、これをずっと続けることはイスラエルにとって不可能だと思う。パレスチナ問題を解決しない限り、イラクの問題、アフガニスタンの問題、全て解決できないと思う。パレスチナ問題を解決しなかったために、火の手が燃え広がっていった感じである。Aさんがおっしゃったように、当のアメリカ人があまり理解していないところが問題だと思う。我々もようやくこの頃、遠い国は我々と関係ないということではなくて、火元はここだなど分かってきた状態で、こういうNGOの団体が実際に行って、発信することは良いことだと思う。

C : 『ユダヤ人はなぜ国を創ったか』はイスラエルの初代首相・ベングリオンが書いた本ですが、ヨーロッパでシオニズムが起こって、エネルギーを集中して国際的な協力を得て、イスラエルの国を創っていくのです。イスラエルに行った時、ガイドさんはベングリオンの墓地

に連れていってくれました。この本を読めば分かりますが、彼らはヨーロッパの中で迫害を受けて、国づくりに集中していったわけですが、その国づくりの中で、こういう問題に発展していったと思います。パレスチナの人たちは自分たちの国として住んでいたわけですから、突然イスラエルの国が入ってきて、アメリカが主導になってああいうものを創ったわけですから、パレスチナ人にとっては我慢ならないことだと思います。でも始めの頃は、パレスチナ人のほうが力が強かったようで、パレスチナ人は徹底的に入植してきたユダヤ人を迫害したそうです。その力がひっくり返って今のような状況が作り出されていると思います。この問題は、今の中東問題の根っこにある問題だと思うので、そう易々と解決するとは思いませんが、解決の方法を見出していないと、世界に平和は来ないと思います。でも私たちがイスラエルに行った時はラビンさんが首相で、すごく平和でした。そういう意味では、平和な時代も望みなくもないと思ったりもします。

**B** : ラビンさんとアラファトさんがオスロ合意で握手した時、「あまりにも多くの血が流されすぎた」とおっしゃったが、それが結局ストップにならなかった。人間っていつまでたっても学習しないんですね。本当に罪深いと思います。

**D** : アラファトさんは以前、ものすごく過激な感じがしたのですが、ラビンさんと平和的な握手されたこともあります。随分変わって今は情けないことになりましたね。ちょうど神戸に行っている時にラビン首相が射殺されたので、忘れられない思い出になっています。

**A** : 以前「NHKスペシャル」という番組で、パレスチナとイスラエルの両方の殺された人の家族が一緒に会ったという話がありました。そういう動きが広がっていくと、パレスチナという新しい国を創ると言う人はシオニストでもなければ、何でもなし。とにかくそこに住んでいる人たちの新しい国をという、マイノリティだけでも新たな本当にあるべき姿に対する動きが双方にあると思います。その両極端が力を持っている限りはダメですよ。その両極端の力をどうやったら止められるかが分からない。

**B** : 希望の芽はあると思います。この前NHKでやっていたよね。イスラエルの若者が兵役を拒否して、「パレスチナ人は殺さない」と。そういう流れが出てきたということは、全く平和の芽がないというわけでもないと思います。やはり大勢は力と力がぶつかるという形です。こういう時は敵か味方かで割り切ってしまうんです。ですから敵も味方もない宗教抜きの共和国を創ろうというマイノリティが力を持てるかどうか、極めて危ういと思いますけど、その存在は貴重ですね。

**E** : パレスチナ側は投石をしていたのに、今は武器を持って戦っているが、武器はどこから入るのですか？

**C** : パレスチナを支援するいろんな国家や団体があって、そこから入ってくると思う。自爆する時は石ではどうにもならないわけで、火薬類が入っていることは間違いないですね。

**B** : イラクの問題では、ドイツやフランスの有力な政治家がコミットしてブレーキかけているけれど、パレスチナの問題についてヨーロッパは意外と関わっていない。もともとはイギリスのバルフォア宣言が始まりだから、もっとヨーロッパは関与して、アメリカを規制してくれないとまずいと思う。責任のスターターのイギリスは今、全然関わっていない。

F：パレスチナ・イスラエル問題もいずれ解決すると信じて祈らなければならないと思う。遠い国なので我々が直接関わるのは難しい。日本に住んでいて、戦争をさせないということに強い働きかけはできると思う。たとえば、イスラエルの軍事国家には協力をしないというような関わり方とか、日本が（行ってしまいました）戦争に行かせないとか、人殺しをさせないとかは、我々も力を出せるんじゃないかと思う。

G：イスラエルの国は神様が与えて下さった国だと言うが、ちょっと通用しないと思います。

C：聖書には、神様がアブラハムに対して約束したと書いてあるが、あの聖書の言葉を引用して、歴史的な今の現実の中で妥当性を持って主張することは認められない。そういう意味において、聖書を読むということはどういうことなのか、もう一度考えなければならない。



### 参考ウェブサイト

- 【JMCC(Jerusalem Media & Communication Center)】<http://www.jmcc.org/>
- 【サブグリーン協会】<http://homepage2.nifty.com/tokada/sabreen/sab-top.html>
- 【バディル資料センター】<http://www.badil.org/>
- 【民族間の和解のためのパレスチナ・センター】<http://www.rapprochement.org/>
- 【グーシュ・シャローム】<http://www.gush-shalom.org/english/>
- 【パレスチナの平和を考える会】<http://www.palestine-forum.org/>

### 参考文献

- 『パレスチナ 新版』広河隆一著 岩波書店
- 『イスラエルとパレスチナ—和平への接点をさぐる—』立山良司著 中公新書
- 『ユダヤ人はなぜ国を創ったか』D・ベングリオン著 サイマル出版会
- 『パレスチナの苦悩』D・マクドール著 佑学社
- 『パレスチナ—動乱の100年—』エリアス・サンバー著 創元社
- 『「対テロ戦争」とイスラム世界』板垣雄三編 岩波新書



### 社会委員会からのお知らせ

8月1日（日）の午後、平和学習会を開催します。小平学園教会牧師・宗像基先生をお招きし、『「なぜ、こんなことに・・・」—教会の責任を問う—』というテーマで講演していただきます。詳細は後日お知らせします。他教会からのご参加も歓迎致します。

《宗像先生のコメント》キリスト教の歴史の中では、迫害を受けた時より、他を迫害した時の方がはるかに多い。このことをまず悔い改め、なぜ？をきびしく問わねばならない。

【宗像先生の著書】☞『聖霊に禁じられて—使徒行伝を読みなおす—』今日の話題社

【小平通信：バベル】☞<http://members.jcom.home.ne.jp/kashii-ke/babel/>